早坂彰恵

第67回全日本大学バスケットボール選手権大会優勝
筑波大学4年

試合終了のブザーと同時に、早坂の目から涙があふれた。のどから手が出るほど欲しかった日本一。これまでの苦しいことも、辛かったことも、全て忘れさせてくれた。

「努力や苦しんだ分は報われるんだなって。ここまで来れたのは、家族、仲間、コーチ、私に関わる全ての人たちの支えがあったからこそ」

「第67回全日本大学バスケットボール選手権大会(以下、インカレ)」は11月23から28日までの6日間、東京都渋谷区の国立代々木競技場第二体育館を主会場に開催され、筑波大が白鷗大を破り、6年ぶり10回目の優勝を果たした。

早坂は中心選手として活躍。粘り強い守備と、175センチの長身と抜群の跳躍力を生かし、オフェンスリバウンドを拾いまくった。また、持ち前のスピードを生かし、外側からドリブルで持ち込んでのシュートと攻守両面でチームを牽引。個人プレーには走らず、チームプレーに徹する早坂は選手たちから全幅の信頼を置かれている。彼女がいなければ、筑波大の優勝はなかったといっても過言ではない。

だが、早坂のここまでの道のりは決して平坦なものではなかった。

登米で早坂家といえば自他共に認めるバスケ一家。父は県屈指の名プレーヤーで「登米に早坂あり」と全国に名をはせていた。娘が、父と同じ道に進むのは想像に難くない。早坂は、小3で地元のスポーツ少年団へ。「ボールを持って攻めるのが好きな子だった。敵、味方関係なく、ボールを取り返してはリングを目指していた」と当時のコーチの猪股勝徳さん。「今は味方からボールを取り返さないですよ」と早坂は照れ笑い。

早坂は、持ち前の身体能力と人一倍の練習ですぐに頭角を現し、中心選手として活躍。中学入学後は即レギュラーとなり、順調に成長していった。しかし、市内では無敵を誇るも、県では結果が残せない。中学最後の県総体では、1回戦で優勝候補の女川中と激突。接戦をものにしたと思った瞬間、ブザービーター(終了直前に放ったシュートが決まること)で逆転負け。早坂は「県優勝を目標に臨んだ最後の大会。とにかく悔しかった。本当に欲しいものは手に入らないんだなって」と振り返る。

中学卒業後、強豪聖和学園に進学。親元を離れ寮生活が始まった。毎朝5時半起床で、朝食と昼食を作り、あわただしく登校。放課後はすぐに練習が始まる。練習は、質も量も中学の比ではない。寮に戻れば、掃除や洗濯、勉強とやることは山ほどあった。

「でも、辞めようとはこれっぽっちも思わなかったですよ」

厳しい環境に負けることなく、1年春からレギュラー入りし、インターハイに出場。日本一を目指すも8強に終わる。翌年こそはと雪辱を誓うもここから1年半、全国への道は全て明成高校に阻まれた。勝てない間の練習は過酷を極めた。

「今思い返しても、あの練習によく耐えられたなって思います。長期の休みは午前午後の2部練習は当たり前。生涯で一番走ったと思います」

厳しい練習を乗り越え迎えた2011年。高校集大成の年を迎えた。この年、聖和は明成を破り、2年ぶりにインターハイとウィンターカップへの切符を手にした。

「東日本大震災があった中、バスケができるありがたみを痛感しました。そういう中だからこそ、全国2冠を取りたかったのですが」

インターハイ8強、ウィンターカップ16強に終わり、またも日本一になれなかった。

12年、筑波大へ進学した早坂に朗報が飛び込む。U-18日本代表に招集され、アジア選手権出場選手に選ばれた。翌年の世界選手権にも招集。しかし2大会とも控えに回り、出場機会はあまり恵まれなかった。

「人生初のレギュラー落ち。本当に悔しかったけど、控え選手がどんな思いで、レギュラーやチームを支えていたか分かりました。本当の意味でチームプレーというものを学べた貴重な体験でした」

大学に戻ってからの早坂は、何事にも取り組む意識が変わった。意識が変われば、行動も変わる。選手として、人として、早坂彰恵は一回りも二回りも成長した。

2年のリーグ戦で2部落ちの危機を体験。3年のシーズンは日本一を目指そうとしていた矢先、選手生命の危機に見舞われる。右足前十字靭帯断裂ー。目の前が真っ暗になった。もうプレーはできない。一時期は本当にそう思った。だが、バスケも日本一も諦めなかった。過酷なリハビリ生活は「日本一」になるという目標が支えてくれた。

ようやく復帰のめどがついた15年1月。再度悪夢が早坂を襲う。右足半月板損傷ー。

「本当にもうだめかと思ったんですけどね。逆に吹っ切れました。できる限りバスケを続けようって」

早坂は、4月にリハビリから復帰。徐々に調子を上げていった。チームはリーグ戦こそ5位に終わったものの、大学ナンバーワンを決めるインカレで悲願を達成した。

「インカレは全てが厳しい試合でした。苦しいところでも我慢できたのは『日本一』になるという確固たる決意。うちは全員が共有していましたからね」

早坂の最大の武器は、スピードでも跳躍力でもない。決して諦めない気持ちとひたむきさー。

大学卒業後は、WJBLの強豪、シャンソンVマジックへの入団が内定している。

「目標ですか。これまでと変わりませんよ」

Hayasaka Akie

1994年3月21日、登米町上館生まれ。父と姉の影響を受け、小3の時にスポーツ少年団登米ウルフズジュニアに入団、バスケットボールを始める。登米中時代は、市内から初めて県選抜メンバー入りを果たす。中学卒業後は、強豪聖和学園高校へ進学し、各種全国大会で活躍する。2012年筑波大学へ進学。中、高、大学と全て1年生からレギュラーで活躍。18、19年と年代別で日本代表に選出され、世界大会に出場した。ポジションはフォワード。父、母、祖母、姉2人の6人家族。身長175センチ、血液型B型。好きな芸能人は木村拓哉